

論 文

家族へのカウンセリング的アプローチの検討 —逐語録をもとにカンファレンスを行って—

新谷由加里・瀬戸奈穂美・菅野久美子・氷見山真子・中村 風
(金沢医科大学病院)

Nursing research of counseling approach to the family
—Conference according to literal records—

Yukari Shintani, Nahomi Seto, Kumiko Sugano, Shinko
Himiyama and Nagi Nakamura
Kanazawa Medical University Hospital

要 旨

この研究は、患者を支える家族に対してカウンセリング的アプローチを行い、より効果的な看護援助をはかり、同時にカウンセリング的アプローチの効果を評価する目的で行った。その際、逐語録をもとに学習グループでカンファレンスを行い検討した。その結果、以下の結論を得た。

- 1) 学習グループでカンファレンスを持ったことにより、面接内容を客観的に検討する事が出来、問題点や重要点を明確にすることができた。
- 2) 無条件の肯定的尊重の態度を一貫し、聴く姿勢で面接に取り組んだことにより、家族の内面表出が進み心理的自由を取り戻し、拒否的態度から肯定的態度に変化した。
- 3) 看護婦は患者の立場に立つ意識を持ちやすく、その事は家族の思いを聴く姿勢からそれやすい傾向があることがわかった。

I はじめに

患者への援助は家族の存在を抜きにして考える事は出来ない。従って、家族をサポートする事は患者への援助につながると考える。しかし看護婦がよく行う指導や助言といった家族への指示的サポート方法は、ともすれば医療者側の一方的価値、判断のおしつけになりがちである。このような対面姿勢を改め、家族の思いを充分聴く事に主眼をおき、クライエント中心の立場に立つカウンセリング的なアプローチを家族へのサポート方法として

試みた。

II 研究方法

1. 対象

：患者への対応で援助を求めてきた患者の家族のうち、面接を行う事に同意した3ケース（以下クライエントと称し、CIと略す）

ケース1：多発性脳梗塞、老年期痴呆で入院中の77歳の男性の長男。

面接の動機…父親への拒否の感情が強く、面倒を見たくないと思っていることが察知さ

れたため、その心情を確認することを目的とし、NsからClに面接を提案した。

ケース2：オリーブ核小脳変性症罹病による反応性抑うつ状態にて精神科に入院既往のある41歳女性の夫。

面接の動機…患者への対応についてどうすればよいか分からず、プライマリーナースに時々相談の申込みがあったため、その心情を確認することを目的に、NsからClに面接を提案した。

ケース3：躁うつ病の躁状態にて精神科に入院既往のある44歳女性の夫。

面接の動機…ケース2と同様に、患者への対応について、時々プライマリーナースに相談の申込みがあった。また、患者に対して否定的な感情が強いと察知されたため、その心情を聞くことを目的に、NsからClに面接を提案した。

2. 期間

; 1989年9月1日～1992年10月10日。

3. 方法ならびに経過

; Rogers. Cのクライエント中心療法の立場に立ち、時間を30分、場所を面接室、もしくはカンファレンスルームとして、各ケースにおいてプライマリーナースが面接をおこなった。また、面接日は、ケース1、2、3ともClとNsのスケジュールを調整し決めたため定期的ではないが、ケース1ではほぼ2週間に一回、ケース2、3では一ヶ月に一回の割合で行った。面接経過に伴ってそれぞれの面接目標が達成できたと判断した時点で、面接を終結した。但し、ケース2においては目標が充分達成できたとはいえないが、Clからの「今のところは大丈夫です。」という申し出があったため、一応の安定が得られたと判断し、一応の終結とした。

ケース1：面接を行ったNs、経験年数6年目、カウンセリング学習歴1ヵ月。1989年11月～1990年3月の期間に7回の面接を行う。

面接目標…Clが患者との関係を見直す機会

の提供。

ケース2：面接を行ったNs、経験年数9年目、カウンセリング学習歴3年。1991年1月～1992年8月の期間に5回の面接を行う。

面接目標…患者の病状の変化に伴うClの感情の揺れの安定化。

ケース3：面接を行ったNs、経験年数8年目、カウンセリング学習歴2年。1992年2月～同年4月の期間に3回の面接を行う。

面接目標…Clの患者に対する否定的感情の表出と受容。

Clの了解のもとで面接内容を録音し、更に、各面接毎にNsが感じ取ったClの表情や様子とNsの心の動きといった主観的な内容も加えて記載し、逐語録をとった。それを、Clの変化、Nsの態度、ClとNsの人間関係の変化の3点に基準をおき、各面接終了毎にカウンセリング学習グループでカンファレンスを持ち、問題点や重要点を明確にすることを目標に、検討した。その際、Rogers. Cのいうカウンセリングの原則にのっとり、本院の臨床心理士のアドバイスを受けた。

III 結 果

1. ケース1の面接内容

面接1ではNsは表面的にClの言葉の流れにとらわれている。Clは面接の目的を気にしており建前を述べ介護できないと話す。面接2では、NsはClの気持ちを理解しよう確認しようという思いが強かったが、技法にとらわれている面が強い。Clは口調は不安気であるが父親への強い拒否の感情を表現している。それに対しNsは「もう少し楽にお父さんのことを考えたらよいのに…」と自分の思いを表現している。面接3ではClは積極的に感情表現している。Nsは、自分の思いの紹介をしている場面が増えている。面接4ではClは父親に対する否定的感情や昔のエピソードに対して、真情を吐き出している。NsはClの気持ちに焦点をあてて聴けており、自分の技法に

表1 ケース1における面接過程

表2 ケース2における面接過程

とらわれる事が減ってきている。面接5ではNsはClの気持ちに焦点をあてようとしているが、Clが「怖くなってきましたよ」と感情表現した場面で、その言葉の意味について確認したい気持ちが先行している。Clは、感情表現を自由に行い、その中で自分を振り返られている場面がある。面接7ではClは父親に対する拒否的態度が無くなり、肯定的評価が増えている。NsはClに集中し、Ns側の自己一致が進んでいる。また、各面接毎のカンファレンスにより、カウンセリング技法にとらわれたりClに集中できていないNsの態度にカウンセラー自身が気づくことができ、その姿勢を改めClの思いに集中することができるようになった。

2. ケース 2 の面接内容

面接1ではNsの態度は指示的となっているが、この時のNsの感情は「楽になってほしい」

という気持ちが先行している。それに対し C1 の言動は自分の思いとは違うということを言語化し誠実に伝えようとしている。面接4では Ns は最初は聴く姿勢で取り組んでいて、自分なりに感じた言葉でじっくり聴いていこうとしている。C1 は自分の感情を言語化するようになり、それに対して Ns の感情はつらい気持ちに近づいており、同じような感情がおきた個人的体験がわき上がってきている。また、後半の Ns の言動は感情移入があり、指示的教育的になっている。面接5では Ns の言動は C1 の思いが何なのかを確認しようとしていて、共感的理解に近づいている。それに対し C1 はその事を知覚できている。Ns の言動には「ご主人の気持ちの方は…」と修正している場面があり、この時の Ns は自分の思いが先行している事に気づき、その時点で C1 側の思いに焦点を当てようと努力している。それに対して

表3 ケース3における面接過程

Clは、Nsの言うことをしっかりと聞いて正確に思いを伝えなおそうとし、さらにお互いの関係が深まっている。また5回の面接終了後より電話相談を行うが、その度にClは楽に感情表出している。各面接毎のカンファレンスにより、Nsの感情がClの辛い気持ちに近づくほど、「楽になってほしい」という気持ちが先行し、指示的教育的態度になる傾向になることが分かった。その傾向を踏まえて面接に取り組むことにより、共感的理解に近づいていった。

3. ケース3の面接内容

面接1ではNsはClの思いに焦点をあて、誠実な態度で対応している。Clの態度は、Nsの言葉をあまり聽かず伝えたいことを次々に喋っていて、否定的な言動がほとんどになっている。そして、本音、真情をどんどん吐き出して行くなかで、ふと自分を振り返られている場面がある。面接3ではClから自己を客観視する言葉が聞かれ、肯定的な内容がほとんどで主觀は既に変革していた。それに対し、Nsは感情の表出が多くなっている。この時の

Nsの感情は、Clの何かふっきれた印象を感じ取り、驚いていて、嬉しいという気持ちが先行している。またClは面接が自分にとって有効であったと言語化している。面接終了後、Clよりの相談はなく、Clは患者をサポート出来ている。各面接毎のカンファレンスにより、NsはClに対してその思いを一生懸命に聴く姿勢であることを自覚でき、同様の姿勢で面接を進めていくことを確認した。

IV 考 察

1. ケース1について；

面接1において、Clは面接の目的を気にし、「家では看病出来ない」と建前を述べている。これは、退院を勧められるのではないかと、防衛的になっていたためと考える。Nsは、表面的でカウンセリングの技法にとらわれている。これは、初めての面接で不安が高じていたためと考える。

面接2,3ではClは父親への強い拒否の感

情を表現している。これは、面接1において、評価や指導を受けなかったという経験から、自由に話してもよい場所と受け取ったためと考える。Nsは、徐々に話を聞くことに集中できるようになってきている。これは、グループでの検討をかさねるなかで自分を客観視でき、面接の不安が軽減したことによると考える。

面接4では、Clは父親に対する否定的感情や過去のエピソードに伴う真情を、自由に表現している。これにより、Nsとの信頼関係は確立したと考える。

面接4、5で、NsはClの思いに焦点を当て聞くことに集中しておりClは自由に感情表現している。広瀬はRogers、Cの言う「無条件の肯定的尊重」について「カウンセラーがClの思考や感情や行動に対して評価するのではなく、Clがその瞬間にどうあっても人間的可能性を持った一人の人間として肯定し、受容し、尊重する姿勢である。」¹⁾と述べ、さらに「そのようなカウンセラーの受容的姿勢によって、Cl自身も自分に受容的に耳を傾けられるようになる。」といっている。故に、Clは感情表出でき、内面的表出が進み心理的自由を取り戻し自己を客観視できたと考える。また、その事により思いの変革に至ったと考える。

面接7では、Clは、父親に対して肯定的な評価をしそれを言語化している。この事から、面接5での思いの変化は一時的な感情ではなく主觀の変革によるものと理解する。

2. ケース2について；

面接1において、Nsの指示的態度に対してでもClがNsの指示的言動のみを受け取っているのではなく、Nsの一生懸命にClに関わろうとしている姿勢が、Clに伝わりそのことによりClも、自分を正確に伝えようとしていたと考える。

面接4において、Nsの聞く姿勢が一貫している場面ではClは自分の感情が表出来てい

る。これはケース1と同様Rogers、Cのいう「無条件の肯定的尊重」に当たると思われる。又、後半Nsは感情移入し指示的教育的になっているが、これはClのつらい気持ちにNsが近づいた事により、Nsの個人的な体験が湧き上がってきたもので、そのつらさはいずれ楽になれるものだと伝えたい気持ちが先行したための態度と考える。にもかかわらず、Clがその後でも感情表出ができたのは信頼関係が深まっていた故に、心の奥深い部分のふれあいがあったからではないかと考える。

面接5ではNsは自分の思いが先行している事に気づき修正しようとしており、又Clは、Nsの言うことをしっかりと聴き、更に自分の思いを伝え直そうとしている。それはお互いがお互いの思いに近づこうとし、更に深い信頼関係を築こうとしている共同作業だと考える。

5回の面接終了後、Clは電話相談の際に樂に感情表出できるようになっている。この事はClの気持ちの中で、この人とは心の深い所での気持ちのやりとりができるという安心感が持てているからだと考える。

3. ケース3について；

面接1では、Nsは誠実な態度で相手の思いに焦点をあてて聴こうとする姿勢を持ちつづけている。そのためには、Clは自らの否定的な感情を次々に言語化できた。これは「無条件の肯定的尊重」に当たると思われ、故に感情表出できたと考える。そしてこの事によりClが感情を吐き出していく過程で自らの思いの振り返りを言語化できている。

面接3ではNs自身の感情表出が多くなっている。これは、Clの思いが変革していた姿を見て、嬉しいという気持ちが先行した為の態度だと考える。また、Clが思いの変革をした事については、Clが面接場面以外でもじっくりと考える時間を持ち、それが自らを明確に振り返り、客観視できる体験となったと考える。

V 結論

1. 学習グループでカンファレンスを持った事により、面接内容を客観的に検討する事ができ、問題点や重要点を明確にするという目標は達成できた。

2. ケース1, 2, 3のいずれにおいても、「無条件の肯定的尊重」の態度を一貫し、聴く姿勢で面接に取り組んだことにより、C1の内面表出が進み心理的自由を取り戻し、拒否的態度から肯定的態度に変化した。

3. 患者へのサポート強化を目的としている為、Nsは患者の立場に立つ意識を持ちやすく、そのことは、家族の思いを聴くという対面姿勢からそれやすい傾向があることがわかった。

VI おわりに

今回の研究目的は患者家族をサポートする事によって、患者の生活環境を整えることにある。従って、C1である患者家族の自己実現が達成目標ではなく、C1がより心理的安定を得ることにより家族内のサポート力がより高まることが達成目標となる。このような過程においてもC1の自己洞察が進み一般のカウンセリングと同様の展開が見られたので、表題

にカウンセリング的アプローチと記した。今回、3つのケースを通して、家族の精神面と患者の生活とは、相互に影響しあう事を実感した。今後も、家族のサポート方法として看護面接について症例を重ね検討していきたい。

〔引用文献〕

- 1) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究、透析患者との面接過程の現象学的分析：看護研究 Vol. 25, No. 4, P 69~86, 1992.
- 2) 遠藤 勉：カウンセリングの目的・基本姿勢と効果：大阪心理出版, 1985.
- 3) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究、透析患者との面接過程の現象学的分析：看護研究 Vol. 25, No. 6, P 37~62, 1992. Vol. 26, No. 1, P 49~62, 1993.
- 4) 吉田 哲：カウンセリングコース・人間関係へのメッセージ：中央カウンセリング研究所、学校法人川口学園、早稲田教育出版 1985.